

# 大阪府八尾市方言の 素材待遇形式ヤルの機能

——三者の関係を表すマーカー——

酒井雅史・野間純平

キーワード：待遇表現, 素材待遇形式, ヤル, 大阪府八尾市方言, 〈ウチ〉マーカー

## 要 旨

大阪府を中心とする近畿方言には、「親愛の情を表す」とされるヤルという素材待遇形式がある。本稿では、待遇表現が話し手による関係把握の表現であるという立場に立ち、大阪府八尾市方言話者のデータをもとに、ヤルの〈機能〉を明らかにした。すなわち、ヤルは、話題の人物が話し手と〈ウチ〉の関係にあり、聞き手もまたその〈ウチ〉の関係にあるという話し手の認識を表す。このような、素材に言及することで聞き手との〈ウチ〉の関係を示すヤルの〈機能〉は、ハルをはじめ、対象を遠隔化する〈機能〉のみを持つ日本語の敬語の中において注目に値する。

## 1. はじめに

大阪府を中心とする近畿方言には、次のような素材待遇形式「ヤル」が存在する。

- (1) a. Aちゃん(同級生) もうすぐ **クルデ**。
- b. Aちゃん(同級生) もうすぐ **キヤルデ**。

(1a)は、同級生である「Aちゃん」が主語の文で、述語は無標の「クル」である(「デ」は終助詞)。一方、(1b)では述語の形が異なり、「クル」に「ヤル」が接続して「キヤル」となっている。この「ヤル」は、主語が話し手と同等、あるいは目下の人物である場合に用いられ、主語が目上の人物である場合に使用される「ハル」などの敬語形式との対比において、「親愛」の待遇形式とされてきた。

しかし、「親愛」と言っても、多くの先行研究では敬語使用との対比が前提にあり、この「ヤル」がどのような機能を果たしているのかという点については、これまで明らかになっていなかった。そこで本稿では、待遇表現が「距離」を表すための表現手段であるという立場に立ち、大阪府八尾市方言(以下「八尾市方言」)話者のデータをもとに、ヤルが持つ機能を明らかにする。なお、本稿で記述の対象とする形式は、大阪府を中心とする近畿地方で使用される形式であり、八尾市もそこに含まれる。ヤルに関する近畿

内部での地域差は基本的に問題にせず、先行研究に言及する場合を除いて、本稿では単に「八尾市方言のヤル」と表すことにする。

## 2. 先行研究と問題のありか

八尾市を含む近畿方言のヤルは、素材待遇形式のハルや軽卑語のヨルなどとともに言及されてきたものの、ヤルを主要な対象として扱った研究はあまり多くない。そこで、本節では、ヤルが大阪方言の中でどのように記述されてきたかを簡単にまとめたうえで(2.1節)、先行研究の問題のありかを指摘する(2.2節)。そして、それを踏まえて本稿の立場を明らかにする(2.3節)。

### 2.1. 大阪方言のヤルに関する記述

大阪方言の素材待遇形式のうち、尊敬語のハルや軽卑語のヨルについては、中井(2002)や西尾(2015)などによって詳しく論じられており、待遇の高さや運用の特質などが明らかになっている。一方、ヤルについては、楳垣(1962)や郡(1997)などの概説において言及があるが、おおよその使い方について述べられているのみである。その中で村中(2010)は、大阪方言に関する概説の記述と待遇表現を扱った先行研究の結果をもとに、ヤルについて次のようにまとめている。

- (2) ヤルは、「摂津方言および北・中河内方言で、若年層女性を中心とするすべての層の話者が、同等もしくは目下への第三者待遇専用の表現として、親愛の情もしくは軽卑の情を示すときに用いるもの」とまとめることができる。(村中 2010: 99-100)

このうち「親愛の情」は、「同等もしくは目下」に対して使用されるという規則に基づいており、ヤルを使用することで、話題の人物を親しいものとして待遇することを指している。例えば、和田(1961: 173)には「和田サン自分デ書キヤッタンヤロカは、書キハッタのような尊敬でなくて「書いたんだろうか」と訳すほかないが、書イタンヤロカよりも和田サンを親しく扱っている」とある。このように、ヤルを使用することによって対象への「親愛の情」が表されるという指摘は、多くの先行研究に見られる<sup>注1</sup>。

### 2.2. 問題のありか

以上の先行研究では、近畿方言のヤルの地理的分布や運用上の特徴が明らかにされている。しかし、主に明らかになっているのはヤルの運用ルールであり、ヤルが表している意味は何かという点がいまだ明らかにされていないと考えられる。このことを、菊地(1997)の〈機能〉と〈適用〉をもとに指摘する<sup>注2</sup>。

菊地(1997)によると、敬語の仕組みを捉える際には、〈語形〉〈機能〉〈適用〉の3つの観点に分けて考えるのが有効だという。〈語形〉は文法論に属する面で、当該の敬

語形式がどのような形をとるかというものである。〈機能〉は意味論に属する面で、「当該の人物を上位者として高める」のような、当該形式に焼き付けられた意味である。そして、〈適用〉は、言語運用論に属する面で、具体的にどのような人物が「上位者」になるのか、逆にどのような人物を「上位者」としてはならないのかといった規則のことである。菊地（1978）では、〈機能〉を「定義」、〈適用〉を「原則」と呼んで明確に区別している。これら3つの観点はそれぞれレベルが異なるため、明確に区別する必要がある。

菊地（1997）のいう3つの観点は、「敬語」全般に関して提案されたものだが、個々の待遇表現形式に関しても同様の考え方ができるだろう。本稿の主たる対象であるヤルについて、先行研究で指摘されてきたことがどの面に属するか考えてみたい。まず、〈語形〉の問題は、ヤルという形そのものやその語形変化、統語的な特徴などである。そして、先行研究で指摘される話し手と同等以下の人物を待遇する際に使用されるという規則は、〈適用〉の問題である。そのような〈適用〉ルールからは、「対象の人物が話し手と同等もしくは話し手より下であることを示す」というような〈機能〉が想定できる。

しかし、ここに問題がある。ヤルの〈機能〉が「対象の人物が話し手と同等もしくは話し手より下であることを示す」ことだったとしても、ヤルも敬語も使わない無標形式とどのような違いがあるかが明らかにされていないのである。敬語に「当該の人物を上位者として高める」という〈機能〉があるとすると、敬語を使わないことで当該の人物が「上位者ではない」、つまり「同等以下の人物」であることが示される。すなわち、ヤルを使うことによって表される「同等以下」と、敬語不使用によって表される「同等以下」は何が異なるのかが問題になる。先行研究の記述では、この点が明らかではない。

### 2.3. 本稿の立場

以上にまとめた先行研究とその問題点を踏まえて、改めて本稿の目的と立場をここで明確にしておく。本稿の目的は、八尾市方言のヤルが持つ〈機能〉を明らかにすることである。なお、ここでいう〈機能〉は、前節で述べたように、菊地（1997）に基づく。

そのため、本稿は、どのような人物を待遇するか、どのような人物が待遇の対象になりえるか、どのような動機でヤルが使用されるか、といった〈適用〉の規則を明らかにするものではない。そして、ヤルに関する先行研究において指摘されてきた「同等以下に対して使う」や「親しみを込めるときに使う」といった記述は〈適用〉のレベルに属すると考える。また、(2)にある「親愛の情」「軽卑の情」といったものも、ヤルを特定の文脈で使用することによってもたらされる語用論的効果であると考えられる。

ただし、本稿は、そういった「同等以下に対して使う」「親しみを込めて語るときに使う」といった記述を否定するものではない。ヤルの性質を明らかにするにあたって、こういった〈適用〉のルールを明らかにすることが重要なのは言うまでもない。むしろ、

本稿においても、〈適用〉の表れである用例をもとに〈機能〉を明らかにしている。しかし、本稿の目的は、個々の用例を説明しうるものとして、当該の形式が持つ〈機能〉を明らかにすることである。

### 3. データ

本稿の記述は、大阪府八尾市高齢層女性<sup>註3</sup>に対して行った面接調査に基づく。また、筆者（野間）<sup>註4</sup>の内省も補助的に用いている。調査では、話題の人物や聞き手を様々に設定して、ヤルが使えるか否かを尋ねた。

ヤルは、上下や親疎といった実際の人間関係にだけ強く規定されるものではなく、話し手が対象をどのような関係として把握しているかに関わるものであると本稿では考える。具体的には、話し手が聞き手と話題の人物の両方を〈ウチ〉の関係として把握していることを表すのがヤルの〈機能〉であると考えた。本稿では、ヤルの〈機能〉をこのように仮定したうえで、それを用例によって検証する。その際、諸先行研究のような、上下や親疎、ウチソトといった類型化された属性の人物を想定し、そのうちのどこに線を引くかを様々な話者に対して尋ねるといった方法はとらない。ヤルの使用に関して個人差はもちろんあるだろうが、それは〈適用〉の問題であり、〈機能〉の解明を目的とする本稿では問題とはしない。例えば義理の姉にヤルを使うか否かという判断が話者によって違っていても、それは個々人の人間関係や待遇行動における線引きの違いであって、ヤルそのものの問題ではないと考えるからである。くわえて、敬語を始め、言語はその意味用法や使い方がコミュニティで共有されていないと機能しない。この点において話者1人に対する調査結果をもって記述することは、大きな問題がないと考えた。

本稿において調査対象を1人の話者に絞ったのは、以上の考えに基づく。本稿の目的を達成するためには、話者の人間関係を把握しつつ、仮説を検証していく必要がある。本稿の記述は、その作業をまずは1人の話者に対して行ったものであり、他の話者にも同様のことが言えるかどうかを今後検証する必要があるのは言うまでもない<sup>註5</sup>。

なお、本稿に挙げる例文は、調査で尋ねたものだけでなく、話者が自然に発話したものも含む。各例文において、「\*」は文法的に不適格であることを表し、「?」は不適格とまでは言わないまでも不自然に感じられることを表す。また、「#」は語用論的に不適切であることを表す。

### 4. ヤルの形式的特徴

本節では、素材待遇形式ヤルの〈機能〉を記述する前に、その形式的特徴について確認する。まず、4.1節で形態面について記述したのち、4.2節で統語面に関する記述を行なう。なお、本節の記述は、諸先行研究で記述されているものと基本的には同じである。

#### 4.1. 形態的特徴

まず、ヤルの形態的特徴について確認する。ヤルは、動詞および派生形の連用形とテ形に接続し、終止形・過去形・テ形・否定形・仮定形をとる素材待遇形式である。

- (3) Aくんが 東京に イキヤル。
- (4) うちの子 今 塾 イッテヤルワ。
- (5) あの子 先生に オコラレヤッタ。
- (6) あの子 全然 ごはん タベヤレヘンネン<sup>注6</sup>

ただし、命令形や意志形はない。これは、主語が三人称に限られるというヤルの性質(4.2節参照)によるものと思われる。

- (7) \*ちゃんと シヤレ。 【命令形】
- (8) \*そろそろ ごはん タベヤロ。 【意志形】

また、完全に非文とまではならないが、丁寧語のマスとの共起はかなり不自然となる。

- (9) ?その 打ち合わせには Aくんが イキヤリマス。

これは、5.2.2節で述べるように、聞き手が親しい人物の場合にヤルが使用されることと関係していると考えられ、文法上は不適切とまでは言えないと考えられる<sup>注7</sup>。

#### 4.2. 統語的特徴

次に、ヤルの統語的特徴、具体的には主語の人称制限について記述する。ヤルは、主語が一人称および二人称のときは使用できず、主語が三人称のときにのみ使用できる。

- (10) \*私 病院 イキヤッタ。 【一人称主語】
- (11) \*あなた 病院 イキヤッタ? 【二人称主語】
- (12) あの子 学校 イキヤッタ。 【三人称主語】

したがって、(13)のような主語が明示されていない発話は、聞き手ではなくその場にはいない第三者が主語であると解釈される。

- (13) いま 何 シテヤンノ?

以上、本節では、ヤルの形式的特徴について記述した。

### 5. 素材待遇形式ヤルの〈機能〉

本節では、八尾市方言の素材待遇形式ヤルの〈機能〉を記述する。結論を先取りして、ヤルの〈機能〉を以下のように仮定する。

- (14) ヤルは、話題の人物が話し手と〈ウチ〉の関係にあり、聞き手もまたその〈ウチ〉の関係にあるという話し手の認識を表す。

(14)においてもっとも重要なのは、ヤルの〈機能〉が話し手と聞き手、話題の人物の三者の関係を表すことにあるという点である。以下、本節ではまず5.1節で、本稿におけるヤルの〈機能〉の捉え方について説明し、5.2節で(14)のヤルの〈機能〉について、

用例をもとに記述する。

### 5.1. 「距離」の表現としてのヤルと〈ウチ〉

本稿が仮定するヤルの〈機能〉は(14)のとおりだが、それについて詳しく検証を行う前に、(14)における〈ウチ〉(および〈ソト〉)について説明しておく。なお、以下で説明するように、先行研究における「ウチ」「ソト」と区別するために、本稿では〈ウチ〉〈ソト〉と表記する。本稿の考え方は、基本的に滝浦(2005)を踏襲しているのので、以下では滝浦(2005)を引用しつつ説明する。

滝浦(2005)は敬語を、話し手・聞き手・話題の人物等の間の上下または親疎にかかわる社会的・心理的距離を表現するための表現と捉え、「距離化」を敬語の機能と考えた。滝浦(2005)によると、ある人物に対して敬語を用いることは、その人物を話し手から「遠くに置く」ことになる。例えば、「これ、おいしいです」のように丁寧語を用いることで、話し手から見て聞き手を「遠くに置く」ことになる。これにより、「丁寧さ」や「あらたまり」といった意味が表されるのである。また、「先生がいらっしゃったよ」のような例では、尊敬語を使用することで、話題の人物である「先生」を話し手から「遠くに置く」ことになる。さらに、聞き手には丁寧語を使っていないため、話し手との距離については積極的に表現していないが、遠くに置かれた話題の人物との対比により、話し手に近い存在として表現されることになる。このように対象の人物を「遠くに置く」ことを「ソト・待遇」と呼び、「近くに置く」ことを「ウチ・待遇」と呼んでいる。そして、「ウチとソトの境界は固定的なものではなく、そのつど話し手の〈視点〉によって構成され更新されるような、流動性の高いものである」(滝浦2005:233-4)としている。

(14)に記したヤルの〈機能〉は、基本的にこの考え方に基づく<sup>注8</sup>。したがって、(14)における「〈ウチ〉の関係にある」とは、対象の人物を「近い人物として表現する」ことであり、待遇表現に関する先行研究でしばしば用いられてきた「ウチ」「ソト」という用語とは異なる。例えば、大西(2016)では、実の父親に対して尊敬語を使用する方言を取り上げており、これは実の父親が自分とは異なる集団に属するという地域の家族制度で説明できることが示されている。すなわち、血のつながった父親でも、地域社会における「ウチ」(同一集団)の構成員でない場合、尊敬語が使われるのだという。

このように、待遇表現の先行研究における「ウチ」は、地域差や年齢差はあるが、あくまで「同一集団に属する」という意味であり、その集団のあり方や捉え方の違いが問題とされる。このことは、待遇表現の仕組みを明らかにするうえでは欠かせない視点であるが、2.2節で引用した菊地(1997)でいうところの〈適用〉のレベルに当たる問題であり、〈機能〉のレベルを問題にする本稿の主たる対象ではない。本稿では、ヤルの〈機能〉を、対象の人物を〈ウチ〉として表現することであると考える。したがって、本稿

では、ヤルが使用されうる対象人物を網羅的に調べるのではなく、ある人物にヤルが使用されている言語事実を受けて、それらを説明可能な〈機能〉を探る。すなわち、この人は「ウチ」だから、あるいは「ウチ」とみなせるからヤルを使用すると考えるのではなく、ヤルが使えるとき使えないとき、使うと不自然になるときはどのような場合かといった用例をもとに、ヤルを使った人物を〈ウチ〉として表現するという〈機能〉をヤルが持つことを導くのである。

## 5.2. ヤルが表現する関係

5節冒頭で先取りしたが、本稿で仮定したヤルの〈機能〉を、改めて以下に掲げる。

- (15) ヤルは、話題の人物が話し手と〈ウチ〉の関係にあり、聞き手もまたその〈ウチ〉の関係にあるという話し手の認識を表す。((14)再掲)

本稿で主張したいのは、ヤルの主たる〈機能〉が、話し手を取り巻く人物間の「距離」を表現することにあるということである。そして、そこには話し手・聞き手・話題の人物の三者が関わる。では、ヤルが表すこの三者の関係とは、具体的にどのようなものなのだろうか。以下では、ヤルが表す話し手と話題の人物の関係(5.2.1節)、話し手と聞き手の関係(5.2.2節)に注目して、用例をもとにこの仮説を検証する。そして、それを踏まえたうえで、三者の関係を表す意味について考察する(5.2.3節)。

### 5.2.1. 話し手と話題の人物の関係

先行研究で指摘されるように、ヤルは「話し手と同等以下の人物」が主語の場合に使用されることが多い。次の例では、「同級生」や「聞き手の子供」が主語の場合にヤルが使用されている。

- (16) Aちゃん(同級生)も 同窓会 **キヤルヤロカ**?

- (17) ○○ちゃん(聞き手の子供) 今 何 **シテヤンノ**?

これらの例においては、話題の人物は話し手が直接知っている特定の人物だが、次のように、面識のない人物の場合や、特定の人物でない場合もヤルが使用される。

- (18) あの 子役 また テレビ **デテヤルワ**。

- (19) お父さんの ところには あの 高校が 裏か なんかに あるから その 高校生なんかが **ノッテキヤツタリナ** するねんけど

(18)では、「あの子役」という面識はないが話し手より目下の人物が、(19)では不特定の「(近くの学校の)高校生」が主語になっており、それぞれヤルが使用されている。

以上のように、ヤルは話題の人物が話し手と同等以下の人物の場合に使用される。これは、ヤルが話題の人物を〈ウチ〉、すなわち近い存在として表現するという〈機能〉を持っており、同等以下の人物はそのような表現をしやすいからだと考えられる。

これと同様のことは、次の例からも説明できる。

- (20) 今日 工場に うちの 社長 **キヤッテン**。

(21) #今日 お父さん とこの 社長 キヤッテンテ。

(20)における主語は「うちの社長」であり、ヤルが使用されている。一方、(21)の主語は「お父さん (夫) とこの社長」であり、この場合はヤルの使用が不適切となる。この違いは、話し手が話題の人物との関係をどのように把握しているかに起因していると考えられる。すなわち、同じ「上」の人物であっても、自分の職場の社長にはヤルが使えて、夫の職場の社長にはヤルが使えないのは、前者が話し手にとって〈ウチ〉の人物(と表現できる人物)であり、後者が〈ウチ〉とは表現できない人物であるためだということである<sup>註9</sup>。同様のことは、次のような例にも言える。

(22) (実の姉が) 旅行 イキヤッテンテ。

(23) # (夫の姉が) 旅行 イキヤッテンテ。

(22)では主語が実の姉であり、ヤルが使用できる。一方、(23)では主語が夫の姉であり、ヤルの使用が不自然になる。これは、話し手にとって実の姉は〈ウチ〉扱いできる人物だが、夫の姉は親戚ではあるものの〈ウチ〉と表現するには不適切な人物とみなされているためであると考えられる<sup>註10</sup>。

このように、ヤルの使用に関わる「ウチソト」は、必ずしも身内かどうかということに限らない。次の例を見られたい。

(24) あの 子役 また テレビ デテヤルワ。((18)再掲)

(25) #総理大臣 また テレビ デテヤルワ。

(24)の主語は「あの子役」、(25)の主語は「総理大臣」であり、どちらも話し手にとっては知り合いでもなければ身内でもない。しかし、前者の場合はヤルの使用が自然で、後者の場合は不自然となる。この違いは、対象が話し手にとって〈ウチ〉とみなせるか否かによるものであると解釈できる<sup>註11</sup>。つまり、この話者にとっては、たとえ面識のない赤の他人であっても、子役は〈ウチ〉扱いができる<sup>註12</sup>が、総理大臣はどうあっても〈ウチ〉扱いができないということである。

以上、ヤルが使用される際の話題の人物の制約をもとに、ヤルは話題の人物が〈ウチ〉の関係にあることを示す〈機能〉を持っているということを述べた。

### 5.2.2. 話し手と聞き手の関係

村中(2010)などの指摘にもあるように、ヤルは聞き手が親しい人物の場合に使用される<sup>註13</sup>。例えば、次の例を見られたい。

(26) 【近所の親しい主婦と話しているとき】

(近所の) ○○ちゃん 学校に イキヤッタデ。

(27) 【近所のそれほど親しくない主婦と話しているとき】

#(近所の) ○○ちゃん 学校に イキヤッタヨ。

(26)と(27)は、どちらも内容は同じだが、聞き手が異なる。(26)のように親しい人物が聞き手の場合はヤルが使用されるのに対して、(27)のようにそれほど親しくない人の場

合、ヤルの使用は不適切となる。このように、実際の運用として、ヤルを使用するのは聞き手が親しい人物の場合に限られるが、この意識は比較的強いようである。例えば、話者がパート職員として勤める職場において、パートの同僚と話すときはヤルを使うが、社員が相手だと使わないというコメントが得られた。

以上のような、聞き手に関するヤルの〈適用〉規則は、聞き手を〈ウチ〉の関係として表現するというヤルの〈機能〉のためであると考えられる。つまり、ヤルは話し手と話題の人物だけでなく、話し手と聞き手もまた〈ウチ〉の関係にあることを示す。ヤルを使用することで、聞き手に対して「あなたは私と近い関係にある」ということを示すことになるので、よほど親しい人が聞き手でなければヤルの使用は不適切になるということである。村中(2010)によるヤルの「使用条件」の1つ「話し手が思わず感情を表してしまうほど話し相手と親しい」ときにヤルを用いる」も、これと同様のことを言ったものだろう。また、ヤルが丁寧語と共起しにくいという性質(4.1節)もこれと関連しているのだろう。

以上、ヤルが使用される際の聞き手の制約をもとに、(14)に示したヤルの〈機能〉のうち、話し手と聞き手が〈ウチ〉の関係にあるという点について述べた。

### 5.2.3. 三者の関係を表す意味

ここまで、(14)のようにヤルの〈機能〉を仮定したうえで、用例をもとにその仮説を検証してきた。そして、ヤルには話し手と話題の人物が〈ウチ〉の関係にあり、話し手と聞き手も〈ウチ〉の関係にあることを表すという〈機能〉があるということ述べた。

しかし、その場合の〈ウチ〉は、無標形式とどのように異なるのだろうか。八尾市方言には、素材待遇形式のハルと、対者待遇形式のデス・マスがあり、それぞれ話題の人物と聞き手を〈ソト〉待遇する〈機能〉がある。例えば、次の例を見られたい。

(28) Aさんが a.キタ／b.キハッタ／c.キマシタ／d.キハリマシタ。

(28)において、aは待遇表現形式を使っていない無標形式だが、bはハルを、cはマスを、dはハルとマスの両方を使っている。ハルを使ったbとdでは、話題の人物である「Aさん」を遠くに置く、つまり〈ソト〉待遇し、マスを使ったcとdでは、聞き手を〈ソト〉待遇している。〈ソト〉待遇されなかった人物は、〈ソト〉ではないという意味において、相対的に〈ウチ〉待遇されることになり、aでは話題の人物と聞き手の両方が、bでは聞き手が、cでは話題の人物がそれぞれ〈ウチ〉として扱われることになる。以上を踏まえると、(28)のaは、話題の人物と聞き手の両方が話し手にとって〈ウチ〉として待遇されていることになる。一方、本稿で主張するヤルの〈機能〉は話題の人物と聞き手の両方が〈ウチ〉であることを表すことである。では、無標形式とヤルの〈機能〉は、何が異なるのだろうか。

その違いは、話し手と誰との関係が〈ウチ〉として表されるかという点にあると考えられる。無標形式の場合、敬語を使わないという点で〈ウチ〉の関係が表される。その

ため、素材待遇形式を使用しないことにより話題の人物が相対的に〈ウチ〉と表され、対者待遇形式を使用しないことにより聞き手が相対的に〈ウチ〉と表されるのである。すなわち、無標形式が表す〈ウチ〉は、話し手と話題の人物、および話し手と聞き手との関係をそれぞれ別個に表しており、その〈ウチ〉関係は有標形式との対比による相対的なものである。

一方、(14)に示したように、ヤルは話し手・聞き手・話題の人物の三者の関係を一度に表す。つまり、ヤルが話題の人物か聞き手のどちらか一方のみを〈ウチ〉として表すことはないのである。

そして、ヤルのこの〈機能〉は、話し手と話題の人物との関係や経験を聞き手とも共有するという形でしばしば表される。例えば、次の例を見てみよう。

(29) 【今日会う約束をしていた親しい友人に】

子供が 熱 **ダシテン**／#**ダシヤッテン**。悪いけど、別の日にしてもらっていい？

(30) 【親しい友人と雑談している】

こないだ また 子供が 熱 **ダシテン**／**ダシヤッテン**。大変やったわ。

(29)は、話し手の子供の体調不良を理由に聞き手に対して予定変更を申し出る発話であり、無標形式の「ダシテン」は使えるが、ヤルを使った「ダシヤッテン」は不自然になる。これは、ヤルを使用することで、子供が熱を出したため予定を変更しなければならぬという話し手の都合について、一方的に聞き手に共有を迫ることになるためであると考えられる<sup>注14</sup>。一方、子供が熱を出したことをエピソードとして語っている(30)のように、事態の共有を迫ることが聞き手に大きな影響を与えないような場面であれば、特に問題なくヤルが使われる。

同様のことは、次のように主語が無生物の場合にヤルが使用される例からもわかる。

(31) 【カーナビの音声案内が頻繁に入ることについて】

この カーナビ、交差点の たんに 律儀に **イイヤルワ**。

(32) (壁に貼り付ける) 吸盤 水で ぬらしたら スーって **オチテイキヤンネン**。

(31)では「カーナビ」が、(32)では「吸盤」が主語になっており、それぞれヤルが使用されている。話し手は、ヤルを使用してこれらの主語を〈ウチ〉扱いすることで、「カーナビが音声案内をする」「水でぬらした吸盤が落ちていく」という事態の経験を聞き手と共有しようとしていると解釈できる<sup>注15</sup>。〈ウチ〉の関係であることを示すことで、聞き手と経験を共有しようとしているのである。

したがって、同じ無生物主語であっても、話し手が〈ウチ〉として表現できないと考えられる次のような場合はヤルが使えない。

(33) 【バス停で一緒にバスを待っている友人に】

#あ、バス **キヤッタデ**。

(34) 【一緒に部屋の外を見ている友人に】

#また 雨 フツテキヤッタナ。

(33)では「バス」が、(34)では「雨」が主語になっており、聞き手は友人だが、どちらの場合もヤルの使用は不適切になる。これは、バスという公共の乗り物や、雨という自然現象は〈ウチ〉という個人的な関係として表現しにくいからではないかと考えられる。一方、次のような場面ではヤルが使用できる。

(35) 【話し手は友人と駅にいる。話し手の家族が駅まで車で迎えに来ることになっていて、2人でそれを待っている】

あ、車 キヤッタデ。

(35)でヤルが使えるのは、主語である「車」(あるいはその運転手である家族)を話し手の〈ウチ〉として扱うことができるからであると言える。

以上、どちらも〈ウチ〉の関係を表すヤルと無標形式の〈機能〉の違いを明らかにした。無標形式は、話題の人物と聞き手との〈ウチ〉の関係を、話し手が個別に表すのに対して、ヤルは、その三者の関係を一度に表すという点に違いがあることを述べた。そして、ヤルのこの〈機能〉は実際の運用において「聞き手に関係や経験の共有を迫る」「話し手と話題の人物との関係に聞き手を引き込む」という形で表れる。なお、これはあくまでヤルの〈機能〉が運用に表れた語用論の効果であり、ヤルを使用することで常に表されるものではない。

## 6. 八尾市方言の待遇表現におけるヤルの位置づけ

ここまで、八尾市方言のヤルを取り上げ、用例をもとにその〈機能〉を(14)のように記述した。本節では、そのような〈機能〉を持つヤルを、八尾市方言の待遇表現の中に位置づける。2.1節で述べたように、先行研究において、ヤルは素材敬語のハルや軽卑語のヨルといった待遇表現形式の中で論じられてきた。そこで、以下では、ヤルとハルの違い(6.1節)、ヤルとヨルの違い(6.2節)について述べたのち、待遇表現形式としてのヤルの位置づけについて述べる(6.3節)。

### 6.1. ヤルとハル

八尾市方言のハルは素材敬語であり、5.1節でまとめた滝浦(2005)の考え方を踏襲すると、主語の人物を「遠くに置く」、すなわち、〈ソト〉待遇する〈機能〉を持っている。この点において、主語の人物を〈ウチ〉待遇するヤルとは逆の〈機能〉を持つと言える。実際、運用においても次のように両者はしばしば相補的になる。

(36) (実の姉が)旅行 イキヤッテンテ。 ((22)再掲)

(37) (夫の姉が)旅行 イキハッテンテ。

(36)では実の姉が、(37)では義理の姉がそれぞれ主語になっている。(36)では、ヤルを

使用することで実の姉を〈ウチ〉として表している。一方、義理の姉が主語である(37)ではヤルを使うのは不自然であり、普通はハルを使うという。これは、ハルを使うことで、主語である義理の姉を話し手が〈ソト〉として待遇しているためだと言える。

このように、ハルの〈機能〉は話題の人物を〈ソト〉として表すことであり、ヤルとは真逆の〈機能〉である。しかし、ハルがある種の「親愛」を表すと指摘する先行研究もあり、これは一見ハルがヤルと同様の機能を果たしているように思われる。では、ハルによって表される「親愛」とは具体的にどのようなものだろうか。滝浦(2007)で引き合いに出されている京都方言のハルの例を以下に掲げる。

(38) (ある学校の内情の話をしていて)

「知ってる人が2人クビにならはってな。」

「あそこはちゃんと黨員の方がいらっしやるから。」 (滝浦 2007 : 53)

(38)において、「知ってる人」にはハルが使用され、「黨員の方」には共通語の尊敬語形式「いらっしやる」が使用されている。滝浦(2007)によると、このように待遇表現形式を使い分けることで、「知ってる人」を「ウチ」扱いし、「黨員の方」を「ソト」扱いしているという。そして、「こうした「はる」の機能が、敬語として対象を「アゲル、ことよりも、対象を「ウチ」的に捉えていることの表現であることは明らかだろう」(滝浦 2007 : 54)としている。

(38)は京都方言の例だが、同様の例は八尾市方言でもありえる。しかし、この場合のハルが対象を「ウチ」的に捉えていることを表すのは、あくまで標準語形との対比において相対的に待遇価が低くなっているためであり、積極的に〈ウチ〉扱いする〈機能〉を持っているのではないと考える。つまり、ハルが「ウチ」的マーカーとして機能しているように見えるのは、話題にのぼった複数の人物の待遇に差をつけるために、対象を「遠くに置く」ハルと、「より遠くに置く」標準語の敬語形式を使い分けた結果である。同様の現象は、滋賀県長浜市方言(酒井 2015)のように、複数の素材待遇形式を持つ方言においても見られる。

以上のように、ハルには「親愛」の機能もあるとする先行研究もあるが、これは話題の人物と聞き手の相対的な距離の問題であったり、待遇形式間の遠隔化の度合いの違いの問題であったりといったことが原因で、ハルの〈機能〉はあくまで遠隔化、つまり対象を〈ソト〉待遇することである。一方、ヤルの〈機能〉は〈ウチ〉であることを表すことであり、この点においてハルと異なる。

## 6.2. ヤルとヨル

2.1節の(2)で言及したように、ヤルには以下のような「軽卑語的用法」があるとされている。

(39) あの男、また間違いヤったわ。

(岸江 1998 : 38)

岸江 (1998) によると、この(39)は、主に男性が言う「また間違いヨッタわ」に対応する女性の表現であり、ヤルには「親愛語の用法」だけでなく(39)のような「軽卑語の用法」の機能もあるという。ヨルは八尾市方言でも使用される軽卑語で、主に男性が使用するとされている。

しかし、本稿の考えでは、このような例もヤルの〈機能〉の表れとして説明できる。すなわち、ヨルのように待遇形式自体に軽卑的な意味がそなわっているのではなく、(39)では、「あの男がまた間違えた」という良くないことを聞き手と共有しようとするためにヤルが使用されていると考えられる。ヤルが表しているのは、話題の人物である「あの男」と話し手が〈ウチ〉の関係にあり、聞き手もまたその〈ウチ〉の関係にあるということである。その際、軽卑的な含みを伴うのは、「また間違えた」という述べられている内容自体が望ましくないことであるためであり、内容が望ましくないことをヤルが表しているわけではない。したがって、次のように、聞き手と共有することが不適切と考えられる内容の場合、ヤルの使用が不適切になることがある。

(40) #あの男、また 人 コロシヤッタワ。

(40)においてヤルの使用が不適切になるのは、人を殺したような人物を〈ウチ〉扱するのは話し手にとっても聞き手にとっても不適切であるからだと考えられる。このことから考えても、ヤルの「軽卑語的用法」は、ヤルにそなわった〈機能〉ではなく、ヤルの〈機能〉が文脈において表れた語用論的な効果であると言える。

一方、主に男性が使用するヨルは、対象を悪く、低く表現することを基本的な〈機能〉としており、ヤルのように対象の人物との距離を表す〈機能〉を持っているわけではないと考える。このことは、上の(40)のようにヤルの使用が不適切な文においても、ヨルなら不自然でないことからわかる。

(41) あの男、また 人 コロシヨッタワ。

また、5.2.3節で言及した無生物主語の文において、話し手が主語を〈ウチ〉扱いできないという理由でヤルが使えなかった(34)のような文も、「悪く言う」という文脈があれば次のようにヨルが使用できる。

(42) また 雨 フツテキヨッタナ／#フツテキヤッタナ。

これらのことから、ヨルの〈機能〉は対象との距離を表すことではなく、当該の事態を「悪く言う」「低く扱う」ことであると言える。

なお、2.1節で触れたように、ヨルは軽卑語としてだけではなく、親愛語としても使用されることがしばしば指摘されるが、これは悪く言う、低く扱うというヨルの〈機能〉が、スタイルの低さという形で表れた語用論的効果と思われる。つまり、わざとインフォーマルなスタイルで話すことで聞き手に近づくというのと同じであり、ヨルが聞き手も〈ウチ〉の関係であることを表す〈機能〉を持っているわけではないということである。岸江 (1998) などの先行研究においては、ヨルとヤルを対応させて論じられるこ

とが多かったが、それは両形式がよく似た場面・文脈で使用されることが多いためであり、両者の〈機能〉は異なっているのである。

### 6.3. 〈ウチ〉を表す待遇表現形式

ここまで、ヤルを他の待遇表現形式ハル、ヨルと比較し、その違いを指摘してきた。いずれも運用上は似た意味を表すように見える部分はあるが、もとになっている〈機能〉は異なっていることを明らかにした。

では、本稿で明らかにしてきたヤルの〈機能〉は、八尾市方言をはじめ日本語の待遇表現の中でどのように特徴づけられるだろうか。本稿で述べたような、話題の人物と聞き手が話し手にとって〈ウチ〉であるということを積極的に表すというヤルの〈機能〉は、「遠隔化」を基本的な〈機能〉とする素材敬語には見られないものである。また、対象が〈ウチ〉であることを表す際も、「ハル」と「(ラ)レル」のように他の形式との対比において相対的に近づけたり、敬語を使わないことによって「〈ソト〉ではない」ことを表したり、あるいはスタイルを下げたりといった方法を用いるのが一般的である。滝浦(2013)が指摘するように、日本語は敬語を中心とした「遠隔化」のシステムを発達させ、対象を「遠ざける」ことに重きを置いてきた。その中において、八尾市方言のヤルが持つ〈機能〉は、注目に値すると言える。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、八尾市方言の素材待遇形式ヤルを取り上げ、話題の人物および聞き手との関係把握のあり方という視点からその〈機能〉を明らかにした。本稿で明らかにしたヤルの〈機能〉は以下のとおりである。

- (43) ヤルは、話題の人物が話し手と〈ウチ〉の関係にあり、聞き手もまたその〈ウチ〉の関係にあるという話し手の認識を表す。(14)再掲)

この〈機能〉によって、ヤルが特定の文脈・状況で使用されたとき、「親愛の情」や「軽卑の情」といった語用論的效果が生じる。そして、「遠隔化」を本質的な〈機能〉とする敬語のシステムが発達している日本語において、素材に言及することで聞き手との〈ウチ〉の関係を示す(示そうとする)ということの本質的な〈機能〉とするヤルを持つ八尾市方言は、注目に値すると言える。

本稿ではヤルの本質的な〈機能〉を明らかにすることを目的としてきたが、ヤルが実際にどのように運用されるのかという〈適用〉の面については、本稿では詳しく論じることができなかった。今後は、ヤルの〈機能〉だけでなく〈適用〉の面、すなわち、ヤルが実際にどのように使用されているか、ハルやヨル、無標形式とどのように使い分けられているかといったことをつぶさに観察する必要がある。これらの残された問題については、今後の課題としたい。

- 注1 なお、(2)でいう「軽卑」とは、「あの男、また間違いヤったわ」のように、主に男性が使用する軽卑語のヨルと同じような用法がヤルにもあるという岸江(1998)の記述を前提としたものである。詳しくは6.2節で言及する。
- 注2 本稿では、菊地(1997)にならって〈機能〉〈適用〉のように表記する。特に〈機能〉に関しては、他の先行研究における用語と区別する意図もある。
- 注3 1950年生まれ(調査時65歳)、女性。居住歴は以下のとおり。なお、八尾市は大阪府内でも「北・中河内」地方に属する。  
0-8:大阪府八尾市, 8-9:兵庫県伊丹市, 9-65:大阪府八尾市
- 注4 1987年生まれ、男性。居住歴は以下のとおり。  
0-28:大阪府八尾市, 28-30:島根県松江市
- 注5 なお、同じく八尾市出身の筆者(野間)の内省が本調査の話者の内省と異なることはなかった。
- 注6 八尾市方言では動詞否定形式として「ン」と「ヘン」が使用されるが、ヤルに後接する際は「ン」ではなく「ヘン」をとるのが一般的である。
- 注7 大阪府と奈良県北部を調査した村中(2014)においても、「食べてやるんです」「食べやりました」のような、ヤルとデス・マスが共起する表現を「使う」と答えた人数は非常に少なくなっている。
- 注8 なお、滝浦(2008:27)での「機能」という用語は本稿でいう〈適用〉を指しており、「意味」という用語が本稿の〈機能〉に当たる。したがって、本稿では、滝浦氏の一連の先行研究における「距離」の考え方を踏襲するが、〈機能〉という用語についてはその限りではない。
- 注9 この例は、会社という組織の「ウチ/ソト」という実際の人間関係がヤルの使用に結びついた例だが、これはヤルの〈適用〉が現実の人間関係にたまたま対応したと考える。
- 注10 これと同様のことが、以下のように岸江(1998)でも言及されている。  
因みに大阪の女性は京都の女性とは異なり、ヤルとハルを巧みに使い分けている。例えば、自分の夫にはヤルを用いるが、夫の友人にはハルを用いる。身内でも自分の父親にはヤルを用いるが、自分の義父にはハルを用いる。(岸江1998:42)
- 注11 正確には、話し手が話題の人物を〈ウチ〉とみなそうとしているという態度が、ヤルによって示されていると言える。このことは、5.2.3節で詳しく述べる。
- 注12 中井(2002)などで指摘されているように、実際には、話題の人物に対する好き嫌いなどの感情もヤルの使用に関係すると思われる。しかしこれは〈適用〉のレベルのことであり、その〈適用〉の実態を説明する〈機能〉を記述する立場に立つ本稿においては大きな問題ではない。
- 注13 これは、聞き手が親しい人物ではないためにそもそも方言形の使用が抑制されるということではない。ヤルと同じく素材待遇形式であるハルなどは、「どこ行きハルんですか」のように、聞き手が親しい人物でなくても使われる。
- 注14 (29)の発話については、「子供がよほど小さい場合や相手が子供の場合には言えるが、普通は言えない」という話者のコメントが得られた。「子供がよほど小さい場合や相手が子供の場合」でもなければ、子供が熱を出したという話し手の事情に対して、聞き手に共感してもらえないだろうという話者の考えがうかがえる。
- 注15 この場合、人の声で話すカーナビや、まるで意思を持ったかのように落ちていく吸盤を

擬人化して表現しているという可能性もある。しかし、そうだととしても、主語が話し手と聞き手の両方にとって〈ウチ〉であることを表しているというヤルの〈機能〉は変わらない。いわば、話し手と同じ関係や経験に聞き手を「引き込む」のである。

### 参考文献

- 榎垣 実 (1962) 「近畿方言総説」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』pp.5-59, 三省堂。
- 大西拓一郎 (2016) 『ことばの地理学——方言はなぜそこにあるのか——』大修館書店。
- 菊地康人 (1978) 「敬語の性格分析——先学の敬語論と私自身の把握——」『国語と国文学』55-12, pp.42-56, 東京大学国語国文学会。
- (1997) 『敬語』講談社学術文庫。
- 岸江信介 (1998) 「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3, pp.23-46, 国書刊行会。
- 郡 史郎 (1997) 「総論」平山輝男ほか編『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』pp.1-61, 明治書院。
- 酒井雅史 (2015) 「滋賀県長浜市方言における素材待遇形式の運用——語用論的運用とその要因——」『阪大日本語研究』27, pp.163-194, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論——ポライトネス理論からの再検討——』大修館書店。
- (2007) 「会話の`場。を切り取る敬語——敬意と疎外のダイクシス——」『月刊言語』36-2, pp.48-55, 大修館書店。
- (2008) 「ポライトネスから見た敬語, 敬語から見たポライトネス——その語用論的相対性をめぐって——」『社会言語科学』11-1, pp.23-38, 社会言語科学会。
- (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店。
- 中井精一 (2002) 「西日本言語域における畿内型待遇表現法の特質」『社会言語科学』5-1, pp.42-55, 社会言語科学会。
- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動——対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮——』くろしお出版。
- 村中淑子 (2010) 「大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について」『国際文化論集』42, pp.91-111, 桃山学院大学国際教養学部。
- (2014) 「大阪と奈良北部の方言に関する調査報告——待遇の助動詞ハル・ヨル・ヤルおよび『〇〇弁』意識——」『現象と秩序』1, pp.127-140, 神戸市看護大学。
- 和田 実 (1961) 「大阪——青年層の大阪弁の移りゆき——」遠藤嘉基・平山輝男・大久保忠利・柴田武編『方言学講座第3巻 西部方言』pp.151-181, 東京堂。

**付記** 本稿は日本語学会 2015 年度秋季大会における口頭発表をもとにしたものである。また、本研究は、JSPS 科研費 26244024 の助成を受けている。

——さかい まさし 大阪大学特任助教——

——のま じゅんぺい 島根大学講師——

(2017 年 5 月 1 日 第 1 稿受理)

(2017 年 10 月 30 日 最終稿受理)

*Yaru* in Yao Dialect, Osaka:  
A Marker to Indicate the Relationship of Three Persons

SAKAI Masashi and NOMA Junpei

Keywords: honorific expression, subject honorifics, *yaru*, Osaka Yao dialect, ‘internal’ marker

The aim of this article is to clarify the function of the subject honorifics form *yaru* in the Yao dialect of Osaka. In previous research, *yaru* is said to indicate the ‘endearment’ because it is used when the subject is younger than the speaker, or the same age. However, this article claims that the function of *yaru* is not to indicate the feeling of the speaker, but the relationship of the speaker, the hearer, and the subject from the viewpoint of the speaker. *Yaru* indicates the close relationship of the speaker, subject, and the hearer. Therefore it indicates that the three members are all in ‘internal’ (or close) relationship. This article claims that ‘endearment’, which is claimed as a main function of *yaru* in previous research, can be thought of as the discourse function by the use of the relation marker *yaru*.

*Yaru* is uncommon in that it represents the ‘close’ relationship of both the hearer and subject from the viewpoint of the speaker, while Japanese honorifics (linguistic politeness) are said to represent the ‘distant’ relationship to the subject or hearer from the viewpoint of the speaker.